

化盗人

伊藤桂一



はな 盗 人
花 盗 人

著者の了
解により
検印省略

昭和37年 3 月30日 第1刷発行

著 者 伊 藤 桂 一

¥ 320 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 豊国印刷株式会社

(藤沢製本)

発行所 東京都文京区 株式会社 講 談 社
音羽町 3-19

© KEIICHI ITO 1962. PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

花盗人	一
腰紐	三
慕情の楽	五
夜の菊	七
邯鄲鳴く夜	九
敵は左内だ！	一九
朧夜	一四
梟	一七一
慾	一九二
灯	二五

花
盜
人

1

雑草に半ば埋^{うず}もれるようにして、男がひとり倒れていた。男のぐるりを鴉^{からす}が一羽、物ほしげにうろついている。よくみると鴉は、男のさしのべられた手に握^かられてゐる、肉片のようなものを狙^あっているのだ。

ここ数年にわたる早魃^{かんぞく}によって、土地を棄て、都へ流れてくる者は跡を絶たない。その男も大方、そうした群の行路病者となつた一人だろう。死んでゐるのか生きてゐるのか、遠目にはよく分らなかつたが、ともかく茅高部^{かやのたかべ}は、駒をとめて、もの珍らしげにそのさまを眺めていた。

かれは右兵衛府に出仕してゐる、かなり高位の役人で、都の西外れに邸宅がある。早朝、遠乗りに出るのが習^{ひょうふ}わしで、その帰途のことであつた。鴉も人間同様に飢^うえてゐる——かれは鴉が、行路病者の屍^{しかばね}を啄^{つば}むのではないか、と、はじめは思つてゐたのだ。

ところが、意外なことが起きた。病者のぐるりを、警戒しながらチョンチョンと歩き廻つてゐた鴉が、肉片に惹^ひかれてその男のほとりまで来た時である。それまで身動きひとつしなかつた男の手が、一瞬間に躍ると、みごとに鴉の脚を捉^{とら}えていた。羽搏^{はば}き鳴き叫ぶ鴉を引き寄せ、寝たまま、その羽をへし折り、むんずと頸^{くび}を締めて殺した。それから羽をむしる。生身^{なまみ}のまま嚙^かじると

しか思えなかった。

そこまで見届けると、高部は鞭を上げて、馬をその男のほとりまで急がせた。男はジロリと凄壮な眼で馬上の高部を一瞥したが、黙々と作業をつづけ、すでに鴉は羽を失いつくして丸裸になっていた。むしり散らされた黒い羽毛が男を埋めている。

「その鴉を食うつもりか？」

高部は馬上でたずねた。

「飢えにたえられん。せめて一刻の間をしのぎたい」

「立てぬ病いか？」

「疫病にとりつかれたまま歩きつづけ、もはや腰もぬけ申した。この鴉めが頼りじゃ。おぬしはおれが、この鴉をおびきよせる餌に何を使うたと思う？」

高部が答えずにいると、男は皮肉に笑った。

「おのれがふくらはぎの肉じゃ。傷の膿みはてたところをえぐりとってやった」

男はゆっくりと、寝返りを打つようにしてみせた。ぼろぼろの衣服の隙から、ふくらはぎのあたりが、たしかにどす黒く血まみれになっている。それをみて、高部は馬を下り、男の傍らに進み寄った。

「どこから来たのじゃ？」

「飛驒の者じゃ。粟一粒食えぬ土地を見すてた」

「百姓か？」

「田畑は持たぬ。人に雇われて暮してきた」

「助かりたいか？」

「助からんでもよい。また、助かりもすまい」

「待て待て。あきらめるにはまだ早い。いまの鴉の捕えざま、みどころがある。助けてやりたいが、構わぬか？」

男は、あやしむような眼で、じっと高部をみた。まさか本気で行路病者を助けるつもりもあるまい、と疑っていたのだろう。

「任せるがよい」

高部は男を抱き上げると、押しあげて馬に乗せた。自分は徒歩になって馬を曳きはじめ「長い辛抱ではないぞ。気を張っておれ。鴉は食うな」

といった。男は馬の上でも、まだしっかりと、羽をむしった鴉を握りしめていた。

2

高部の屋敷に、従者として住みついてから、男は名を鴉丸からすまると呼ばれた。粗野で無愛想だが悪気はない。十日ばかりは高熱や痛みで呻吟しんぎんしたものの、都の薬師の業わざが効いたものだろう。峠を越すと、みるまに気力を取戻し、元の頑健な身体になっていった。だいいち、おそろしく力がある。手洗水ちうせんすいを入れた石臼いしうすなどは、軽々と持ち上げた。その鴉丸は、生命いのちを助けて貰った高部への

恩義にはひどく感じたものだろう、周囲が感嘆するほど、骨身を惜しまず働いた。

高部は庁へ出仕しているとき、上司である御堂政近に、鴉丸の話をしたことがある。座興のもりらしかったが、政近はその話をことさら面白がり、何かと問い重ねてきた。

「いちど、ごらんになりませぬか。このごろは一そうに肉もつき、庭先をのっしのっしと歩いております。容貌はとみに魁偉、まるで役に立つ熊を飼っているようなものです」

「面白い、面白い。ぜひ見せて貰おう」

翌る日、政近は高部の屋敷にやってきて、眼のあたりに鴉丸を見た。思いのほかに気に入ったらしく

「どうだ。あの男をわしにくれまいか」

と、高部にいいはじめた。相当執心の模様である。

「なににお使いなされます？」

「姫の身の護り役にしようかと思う。あれなら律義に忠誠を尽くすのではないか。なにぶん、あの通りの娘ではな。そうでもせぬと心配でならん。そうは思わぬか？」

「まさか、そのようなことも」

高部は少し口ごもったが、別にはっきりと否定もしなかった。政近の娘志麻江の行状についてはすでに定評がある。高貴の身分の娘とも思えぬ奔放さで、気が向くとどこへでもひとりで出掛けて行く。どんな男とさし対しても物怖じしない。いかに気性の強い女だとはいえ、親の身になってみると、片時も眼が離せぬ気がするのだろう。

「あの男を、姫の従者にできると助かるのだが」

「いいふくめてみましょう。私への恩義に感じておりますので、納得させるに骨が折れると思いますが、少々の御猶予を頂ければ」

「頼むぞ。お前にとっても大事な男だろうが、ま、悪いようにはせぬつもりだから」

政近は、多分に意味を含めたことをいい置いて、帰っていった。

高部はその後、鴉丸をどういいふくめたものか、三日目には鴉丸を伴って、朱雀大路にある政近の邸を訪れた。鴉丸は庭先に控え、政近と娘の志麻江に面接したが、よくよくいいきかせられていたとみえ、恐縮し切った態度をみせた。地に額をすりつけるようにしたきりで、ロクに顔も上げない。

「新主がまぶしゅうてならんものようですが、これで、馴れると山家の土謡などを唄います。もっとも、少々濁酒などを与えませぬと」

「酒が好きか。なるほど。濁酒なら毎夜でもあてごうてやろう。鴉丸よ。どうだ、われらが気に入ったか、どうかな」

「私めごときをお召し下され、まことに身に余ってござります」

鴉丸は、かしこまった挨拶をして、やっと顔を上げる。その眼は政近への深い恭順の意を表わしているように、いかにも朴訥な家僕の表情になっていた。だがその視線が志麻江に移ったとき、鴉丸の顔には「ほう」と改めて眼をみひらく驚きの色がみえた。これが自分のかしこまことと主人であるのか、世にもこれほどの美しい女が——と、山男ながらに度胆を抜かれたのであ

ろうか。

「娘だ。わがままでてこずろうが、よく面倒をみてくれよ」

政近は、頷いて平伏する鴉丸を満足げにみた。たしかに毛むくじやらで頑丈な体軀。他人には兇猛でも主筋には全くの服従をする男、と、みるからにたのもしく思えたのだ。

「なんと強そうな。これでは、都の戯れ男どもが、さぞかしふるえあがることでしょう

楽しい玩具をでも手に入れたように、志麻江も、はしゃいだ声を出した。志麻江はとに足踏、彫りの深い容貌をしている。その美しさは類い稀だが、奢りの中で育てられた為か、天性の不遜の氣質からか、冷たく射るように人を見る。それがますます志麻江の美しさを引き立たせ、高嶺の花の貫禄を装わせているようだ。志麻江を知る男のすべてが、その美貌と容姿の端麗さに絶対の関心を示しながら、しかも積極的な行動に出ることに足踏みしたのは、彼女のなかに仕舞われている、本来の氣品と氣質の激しさを惧れたためだろう。

鴉丸は、美女にかしづく野獸のように、その日から、志麻江の影の形のように寄り添いはじめた。夜更け、鴉丸は、邸はずれの下僕小屋から、ひょっくりと起き出しては、志麻江の寢るあたりを見廻って歩く、犬のような習性が身についた。志麻江がどこかへ出向く折は、呼ぶ前にどこからかのっそりと現われてきて後に従う。腰に短かい山刀のようなものをさしていた。

志麻江は身軽に、どこへでも出掛けて行くが、行先で、鴉丸はつくねんと膝を抱き、志麻江の出てくるまで、まるで啞のように動かず待っている。一と月と経たぬうちに、この異様な主従の噂は四方に拡がった。姫の虫除けとしては、おそらくこのくらい適切なものはなかったろう。志

麻江のあとに従う、髻^{ひげ}だらけの男の、細いがその底に説明のし難い光を宿した眼つきをみると、行きすぎる男たちはみな舌打ちをした。手を出そうにも、この獐^{どうもう}猛^{もう}そうな飼^{かひ}い犬^{いぬ}がついていては、どうにもならなかったのだ。

「まことによい贈り物を得たものだ。まさか、あれほどとは思わなんだ。お蔭でわしも、枕を高うして寝ていられる」

政近は、高部に逢う毎に、そんなことをいった。やがて高部の官位が引き上げら宿した眼つは、政近から貰^{もら}い物などもあった。

「鴉丸は、その後どのようなでございましょう」

高部は、政近の邸に出向くと、必ずそれを挨拶がわりにした。あるとき政近は、大分ご機嫌で、こんな話をした。

先日のこと、志麻江は鴉丸ひとりを供にして、北野の奥にある縁辺の者の家まで出かけたことがある。野遊びのつもりもあって、身軽ないでたちだった。出る時は好天だったが、帰途、野のまん中で、思いもよらぬすさまじい降雹^{こうひょう}に逢った。いっとき礫^{つぶとん}大^{だい}の雹^{ひょう}が、いちめんに降りそいだが、鴉丸はそのとき四^よつ匍^は匍^はいになって、その身体^{からだ}の下にしっかりと志麻江を抱きこだったくした。帰宅してから志麻江の話では、いのちもあやういほどの、降雹^{こうひょう}のさまであったという。

「それ以来、鴉丸には特に目をかけてやっておる。姫も何かと、物など与えたりしておるようだが、申し分なく忠義の男だ。改めて礼をいうぞ」

高部は帰るみちみち、鴉丸の捨身の献身は、美女に対する野育ち男のひそかな愛慕の情のゆえ

ではあるまいか、ま、それはそれでよいのだが——と、ひとりで苦笑した。

3

政近の別邸は、嵐山の近くにあった。秋になると、庭いちめんに菊が咲いた。このころの幾日かを、志麻江はこの別邸で過ごすことになっていて、家僕や雇い女も何人か同道する。

また、政近は、佳き日を選んでこの別邸へ、昵懇の者を招待して、菊見の宴をひらくのが習わしだった。志麻江の琴と今様が、例年の評判を得ている。政近は、今年の宴席に、それとなく志麻江の縁談についても話を出さねばなるまい、我儘に過ぎさせたが、明年の春にはぜひとも華やかな婚儀を——と、ひそかに考えていた。それについて心当りもあった。式部省致仕の高官津雲成岡の息子入箭のことだが、志麻江はこの男を鼻であしらう風で今迄はまるで話に乗らなかつた。しかし、今度の菊見の宴を機会に、少々無理を押しても話をまとめてしまおうと政近は計画していた。

入箭は親の権勢に頼っている、女蕩しだけが能ののらくら者で、もちろん人間を見込んで政近が志麻江を娶合そうというのではなかった。それによって津雲家と縁戚の關係を保っておけば、眼をつむっていても昇進して行けるという見通し、またそれをさかんに匂わせながら、息子のために志麻江を求めてやろうとする、父成岡の心根を知りぬいていたからである。

「色事にかけては押しの強いことでご評判の入箭さまが、私に對してだけは、なぜ親の御威光を

借りようとなさるのでしよう。あののっぺりした顔を、私の前にお出しになればよい。私がどんなに無関心かを、よくよく得心なさるよういきかせてあげますのに。あのような他愛ない男と添う位なら、いっそ鴉丸に抱かれた方がましです」

父が、何かにつけ入箭のことをいい出すので、志麻江はそういつて気強くきめつけたことがある。そのときは、さすがにいいすぎと気づいたか、志麻江はすぐに詫びたが、父は気にもとめぬふうに笑っていた。政近には、政近なりの目算があった。娘のきびしい抵抗は、半ば観念させられて、できることを承知しての上のことだ、と読んでいた。それで、菊見の宴の数日前から、入箭だけを招いて、できるだけ志麻江と馴染ませよう、どつみち抜きさしならぬ縁組だということを、じっくり教え込むよりほかはない、と考えていたのだ。

——ところが。

志麻江が別邸へ赴いたあと、しばらくして入箭が訪ねて行くという日の、前晩のことである。別邸で、思いもかけぬ事件が持ちあがった。

夜更けに、邸内へ賊が侵入し、抵抗する従者の一人を殺し、侍女を縛し、その揚句、志麻江の寢所に忍び入って、彼女を犯して去った。志麻江は男と争い、突き倒された際に頭をは、て、失神したままの状態で助けられた。暗がりであり、相手の男も記憶にないといったし、よほどの痛手であるにもかかわらず、気の強い娘だけに泣きもせず、また多くを語ろうとしなかった。

この夜の出来事で、奇妙なことが二つあった。一つは、賊は物盗りの意を全く持たなかったらしく、邸内は一物も掠められた形跡がない。ということは、志麻江ひとりを、狙ったものと解す

べきである。今一つは、平素あれほど志麻江の身边に気を配っている鴉丸が、この大変事にもかかわらず、全く物の用に立たなかつたことである。彼は少々の濁酒で、いつになく泥酔したものか、騒ぎのさなかにも容易に起き出て来なかつたという。

家人からの急報によって、庁ちやうから、検非違使けひいしの金崎与良かねさきよらが、二、三の下役を引き連れて取調べに出向いてきた。与良は三十を越えて間もない働き盛りの男だったが、従者の殺されいつとよりも、志麻江の犯されたことに多大の興味をもった。それは犯人が、志麻江に関心を持つ者にしぼられるため、捜査がやり易いということではなかつた。なぜなら、志麻江の容色を知る男だったら、だれでも、たとえ暴力を以てでもその肌を得たいと願わないものはなかつたらう。もしそうとすればこれは容易のことではない。与良が考えたのは、この変事が自分の手に渡った以上、もはや当主の政近は、娘の身に起きた不祥事ふしやうじを、たとえ千金を積んでも揉み消すことはできまい、ということなのであつた。与良は家人の報告を得たとき、これで政近も何かと運の傾いてゆくきっかけになるだらう、娘の評判が評判だっただけに噂の風向きもきつかるう、いまに身の置きどころもなくなるう、と予想した。そして、自身が恩顧を受けている、政近たちの政敵である群城多勢ぐんじやたせのために、この事故を最大限に利用してやらねばなるまい、と内心それを喜んだ。当時の錯雑さくさつした権勢闘争の網の中では、検非違使もまた身の保全と栄達については、不断に機敏な頭の回転が要求されていたのである。

さて、取調べが進むにつれてはっきりしてきたことだが、犯人はひとりなのか数名なのかさえ、とり乱していた家人は誰も覚えてはいなかつた。わかつたことは、賊が、面体を黒布で蔽おほつ

ていたらしいということだけであるが、それも暗闇の中のことではっきりはしていない。与良は、付添の者たちを一人一人呼んで聞きただしているうち、鴉丸からすまるの番が廻ってくると、その眼にあからさまに疑いの色を濃くした。鴉丸は与良の前でおびえの情をかくしきれず、しきりに身をふるわせてみえたのだ。鴉丸の泥酔の不覚を、与良は鋭く追及した。

「昨夜に限り酔いが廻ったか。酔いを廻さねばならぬ事情があったとみえる。それが読み抜けず、検非違使の職が勤まると思うか」

周囲の者たちは、取調べに対する鴉丸の態度をみて、もしや？ と思い込んだほど、彼の挙動は平静を欠いていた。鴉丸は、毎夜の例で濁酒を与えられて飲んだが、昨夜のものはふしぎに悪酔がして思わず昏睡こんすいした。なにか身のしびれるような、薬物がまじっていたように思える——と、そればかりを真剣な眼になってくり返した。与良は薄笑いをうかべて、聞き流していた。すると、志麻江が傍らから鋭くつめ寄ってきた。

「私はこの眼で、かすかながらも賊の形はみえています。なんで鴉丸が。この男は、私の身を守れなかったことを悔いて、いたたまれぬ氣で取り乱しているのです」

「疑い得るものは、誰をでも疑うがこの身の役目。あたら高嶺の花を散らした痴ちれ者もので、この手できっと捕えてみせよう」

従者の殺害よりも、志麻江のことを重んじた、意地の悪い返事を与良はしたが、ともかくそれで、一応鴉丸の嫌疑は除いたらしかった。

与良は、その日じゅう別邸にとどまって綿密な調べを続行したが、夕方になって、ようやく手